

ケース会議の分析における5分間セグメント採用の 妥当性に関する一考察

中村賀陽子* 岡部 克己**

本研究は、言語治療士の臨床能力を向上させるためにケース会議を行なう上で、実用性の高い検査バッテリーのあり方について検討することを目的とした。そこで、日本語版 The Supervisory Transactional System (STS) を使用し、次の2点を検討した。すなわち、ケース会議の内容全体を代表するものとして、5分間セグメントを採用することの妥当性、及び検査結果の分類・評価における客観性を調べるため、複数の検査者間の一致度、についてである。

この目的のため、全会議内容の分析結果指数と5分間セグメントの分析結果指数について、両者間の相関係数を求め、またt検定を行なった。

主な結果は以下の通りである。

1. ケース会議において、会議の中程の5分間セグメントによって、会議全体の質を代表させることは、ある程度可能である事が認められた。会議の質を表わす会議効果に関する両群の相関係数は+0.68であった。また、両群に統計学的有意差は認められなかった。

2. ランダムに採上げられた2回のケース会議において、検査者3名による評価の一致率は極めて高く、83.7%~99.5%であった。

キーワード：スーパービジョン スーパーバイザー 言語病理学 会議効果 ケース会議用検査
バッテリー

問題および目的

言語治療学を専攻する学生臨床者にとって、質の高いスーパービジョン（指導・監督）がなされることは、臨床能力の向上という点で大変重要なことである。スーパービジョンの場としては、治療セッション後に行なわれる、スーパーバイザー（指導・監督者）对学生臨床者の個別指導や、スーパーバイザーと学生臨床者及び複数の観察者（出席者）による討論形式のケース会議等があげられる。ここで学生臨床者は、治療技術のみならず自己洞察力を含む臨床者としての心構えなど全人的要素を学ぶことができる。

スーパービジョンをより有効なものにしていくためには、絶えず個別指導やケース会議の質を客

観的かつ手軽に評価しうる手立てが必要となる。この目的のため、近年、言語病理学の分野で幾つかの検査用具が開発されてきた。

Oratio (1982) は、スーパービジョンの会議場面を分析するThe Supervisory Transactional System (以下STSと略す)を開発した。姉崎・岡部 (1989) は、このSTSの日本語版を作製し、失語症患者のグループ訓練に関する10回のグループ・ケース会議を分析する試みを行ない、会議全体と会議の中程からランダムに抽出した5分間セグメントを比較した。その結果、会議の質を表わす会議効果に関する両群すなわち会議全体と5分間セグメントの相関係数は+0.66であることを見出した。この事から、STSを適用したグループ・ケース会議では、会議の中程の5分間セグメントの質によって、会議全体の質を代表させることは、ある程度可能である事が認められた。

* 伊勢崎・福島病院

** 筑波大学心身障害学系

しかしながら、上掲の研究では、10回に渡るケース会議のうち、3回算出不能な結果指数が出たこと、及び検査結果の分類・評価を一人の研究者で行なったため若干客観性に欠けることが問題点として残された。そこで本研究では以下に示す2点を目的とする。

1. 研究対象となる会議回数を増やし、グループ・ケース会議の内容全体を代表するものとして、任意に抽出した5分間セグメントを用いることの妥当性をより厳密に検討すること。

2. 検査結果を分類・評価する際の客観性を検討するため、複数の検査者間の一致度を求めること。

方 法

分析対象

以下に示す2点を分析対象とする。

1. ケース会議ごとの全会議内容。

2. ケース会議ごとに任意に抽出した5分間セグメント。このセグメント任意抽出に関しては、原則として、全会議時間の中間から5分間をデータとして採用する。又、その際、明らかに不相当と判断される場合には、中間の5分間を除外し、その前後の5分間をデータとして用いる。不相当な箇所としての大まかな基準として、一人の発話時間が3分を越える場合、及びスーパーバイザーと臨床・観察者の発話のやりとりが5回以下の場合、と定めてそれら2箇所を除外した。但し、ここで臨床・観察者とは、言語治療士と観察者、又は学生臨床者と他の学生のことであり（以下、臨床・観察者と略す）。

なお、上記1及び2においては、スーパーバイザーと臨床・観察者との発話内容に限定し、発話のやりとりを分析対象とする。また、臨床・観察者同士の発話のやりとりは、グループ用STSの分析カテゴリーシステムでは分析が不可能であるため、分析対象から除外する。

分析カテゴリーシステム

本研究では、姉崎・岡部（1989）によって作製された日本語版グループ用STSを用いる。グループ用STSの分析カテゴリーシステムは、ケース会議の発話内容を分類し、評価するための、スーパーバイザー用カテゴリー7個と臨床・観察者用カテゴリー4個の合計11個のカテゴリーを持っている。各カテゴリーは3段階の質的機能レベルより成り、

スーパーバイザー側は、会議環境カテゴリー群（カテゴリー1, 2, 3, 4）と成長促進カテゴリー群（カテゴリー5, 6, 7）から成り、一方、臨床・観察者側は、自己反省カテゴリー群（カテゴリー8, 9）と方策提供カテゴリー群（カテゴリー

Table 1. 分析カテゴリーシステムの概略

	カテゴリー	カテゴリーの名称	カテゴリー群の名称
スーパーバイザー側	1	感情移入	会議環境カテゴリー群
	2	肯定的評価	
	3	誠実な態度	
	4	具体的指導	
	5	観察や情報の提供または要求	成長促進カテゴリー群
	6	問題行動の指摘	
	7	治療方策の提供または要求	
臨床・観察者側	8	観察や情報の提供または要求	自己反省カテゴリー群
	9	臨床的自己探究	
	10	問題行動の指摘	方策提供カテゴリー群
	11	治療方策の提供または要求	

10, 11) から成る。Table 1. にその概略を示す。

分析処理システム

グループ用STSの分析処理システムは、分析処理システム(A)と分析処理システム(B)より成る。分析処理システム(A)及び(B)は、本論文末に示した(附表1, 及び2参照)。

分析処理システム(A)では、ケース会議ごとの機能した各カテゴリー・レベルについて、機能した時間(秒)、事象数、効果的レベルが算出される。また、分析処理システム(B)では、分析処理システム(A)の結果に基づいて、ケース会議ごとの、スーパーバイザー側と臨床・観察者側の両者の事象数の総合計や時間総合計、また各カテゴリー群の機能した質(各結果指数)、さらにケース会議の質の総合的評価である会議効果が算出される。

分析

ローデータの収集方法は、毎回のケース会議内容をカセット・テープレコーダーに録音し、それを再生して全会議内容をすべて文章化する。また、複数の人が同時に発話した場合には、その時の状況で最も優勢な発話をデータとして採用した。次

に、文章化された内容を、STSの分析カテゴリーシステムに従って、該当するカテゴリー及びレベルに分類する。但し、全会議内容の中には、臨床・観察者同士の発話も発現したが、これは分析対象から除外した。

研究目的1, 2の分析手続きは以下の通りである。

[研究目的1. に関する手続き]

1. ケース会議ごとの全会議内容を文章化する。(28回分)

2. 文章化した全会議内容をSTSを用いて該当するカテゴリー及びレベルに分類する

3. ケース会議ごとの全会議内容を録音したテープを再生し、ストップ・ウォッチを用いて機能した各カテゴリー・レベルの時間(発話時間)を測定する。

4. 分析処理システム(A)を用いて、機能した各カテゴリー・レベルの発話時間をもとに、事象数と効果的レベルを算出する。但し、発話時間の3秒を単位として1事象とみなし、レベル値と事象

方法を示す。

6. 各ケース会議の全会議内容の中程から、任意に抽出した5分間セグメントに関して、分析処理システム(A)及び(B)を使用することによって、機能したカテゴリー・レベルの発話時間、事象数、効果的レベルを算出し、さらに、各結果指数(\bar{X}_1' , \bar{X}_2' , \bar{X}_3' , \bar{X}_4' , \bar{T}')を算出する。但し、小数第3位を四捨五入する。また、全会議内容の分析結果と区別する意味で、各記号にプライム符号(')を付記した。

7. 全会議内容の各分析結果指数(\bar{X}_1 , \bar{X}_2 ,

Table 2. 各結果指数の名称とその記号

スーパーバイザー側	臨床・観察者側	
会議環境指数	\bar{X}_1	自己反省指数 \bar{X}_3
成長促進指数	\bar{X}_2	方策提供指数 \bar{X}_4
会議効果 \bar{T}		

Table 3. 各結果指数の算出方法

結果指数	算出方法
\bar{X}_1	会議環境カテゴリー群における $\frac{\text{効果的レベルの合計}}{\text{事象数の合計}}$
\bar{X}_2	成長促進カテゴリー群における $\frac{\text{効果的レベルの合計}}{\text{事象数の合計}}$
\bar{X}_3	自己反省カテゴリー群における $\frac{\text{効果的レベルの合計}}{\text{事象数の合計}}$
\bar{X}_4	方策提供カテゴリー群における $\frac{\text{効果的レベルの合計}}{\text{事象数の合計}}$
\bar{T}	$(\bar{X}_1 + \bar{X}_2 + \bar{X}_3 + \bar{X}_4) \times \frac{1}{4}$

数の積を効果的レベルの値とする。また、発話時間が3で割り切れない場合には、小数第1位を四捨五入した値を事象数とし、さらに、1回の発話時間が1秒以上3秒未満の場合でも、発話があったとみなして、これを1事象としてカウントした。

5. 分析処理システム(B)を用いて、スーパーバイザー側と臨床・観察者側の両者の各カテゴリー群の機能した質、すなわち、各結果指数(\bar{X}_1 , \bar{X}_2 , \bar{X}_3 , \bar{X}_4 , \bar{T})を算出する。但し、小数第3位を四捨五入する。Table 2.に各結果指数の名称とその記号を、また、Table 3.に各結果指数の算出

\bar{X}_3 , \bar{X}_4 , \bar{T})と5分間セグメントの各分析結果指数(\bar{X}_1' , \bar{X}_2' , \bar{X}_3' , \bar{X}_4' , \bar{T}')とのそれぞれ対応する結果指数同士について両者間の相関係数を算出し、また、t検定を行なう。両群の相関については、ピアソンの相関係数により、小数第3位を四捨五入する。

8. ケース会議ごとの全会議内容の分析において、算出した各結果指数を図表化する。

[研究目的2. に関する手続き]

9. ケース会議二例を取り上げ、3名の分析者(研究者外2名)がSTSの分析カテゴリーシステ

ムを用い、会議内容全体をカテゴリー・レベルに分類し、評定の一致率を求める。分析者の一名は、筑波大学教育研究科修士課程学生（1年生）である。他の一名は某病院に勤務しており、本研究において失語症グループ訓練の指導を担当した言語治療士である。一致率の求め方は以下に示した通りである。

$$\text{一致率} = \frac{\text{評定の一致した事象数}}{\text{全事象数}} \times 100$$

結 果

ケース会議の実施状況

失語症グループ訓練ケース会議及び症例報告ケース会議は、合計28回実施された。失語症グループ訓練ケース会議の実施状況をTable 4.に、症例報告ケース会議の実施状況をTable 5.に示した。失語症グループ訓練ケース会議は、合計18回実施され、1回30～70分程度であった。出席者は、研究者の一人、岡部が指導教官・スーパーバイザーとして参加した外、修士課程1、2年生及びボラ

ンティアの人々であった。症例報告ケース会議は合計10回実施され、1回30～50分程度であった。出席者は上記指導教官・スーパーバイザー及び修士課程1、2年生と研究生であった。

5分間セグメント分析の妥当性に関する分析結果

1. 5分間セグメントの分析結果 本研究では、分析対象として、28回のケース会議の全会議内容と会議の中程からランダムに抽出した5分間セグメントを用いた。ここでは、会議内容全体と5分間セグメントを比較する。

以下、Table 6.及びTable 7.に失語症グループ訓練ケース会議及び症例報告ケース会議の全会議内容の分析結果指数を示す。

また、Table 8.及びTable 9.に全会議内容の事象数を示す。

全会議内容の分析では、Table 6.及びTable 7.に示したように、すべての結果指数が算出されており、すべてのカテゴリー群が機能した。

次にTable 10.及びTable 11.に各ケース会議の

Table 4. 失語症グループ訓練ケース会議の実施状況

回	期 日	会議時間	スーパーバイザー	臨床・観察者	出席者の合計
1	S.60 3月22日	58(分)	指導教官	ST(1)MC学生(2)その他(1)	5(名)
2	4月5日	48	同上	ST(1)MC学生(1)その他(1)	4
3	4月19日	69	同上	ST(1)MC学生(2)その他(1)	5
4	6月14日	45	同上	ST(1)MC学生(2)その他(2)	6
5	6月28日	44	同上	ST(1)MC学生(2)その他(2)	6
6	7月12日	51	同上	ST(1)MC学生(2)その他(2)	6
7	7月26日	52	同上	ST(1)MC学生(1)その他(1)	4
8	9月6日	30	同上	ST(1)MC学生(2)その他(1)	5
9	9月20日	33	同上	ST(1)MC学生(2)その他(3)	7
10	10月4日	45	同上	ST(1)MC学生(2)その他(1)	5
11	S.61 5月16日	45	同上	ST(1)MC学生(2)	4
12	5月30日	35	同上	ST(1)MC学生(2)	4
13	6月13日	30	同上	ST(1)MC学生(2)	4
14	6月27日	44	同上	ST(1)MC学生(2)その他(1)	5
15	7月11日	40	同上	ST(1)MC学生(2)	4
16	9月5日	34	同上	ST(1)MC学生(2)	4
17	9月19日	42	同上	ST(1)MC学生(2)	4
18	10月17日	39	同上	ST(1)MC学生(2)	4

Table 5. 症例報告ケース会議の実施状況

回	期 日	会議時間	スーパー バイザー	学 生	出席者の 合 計
1	S.61 5月24日	43(分)	指数教官	MC学生(4)研究生(2)	7(名)
2	6月6日	40	同 上	MC学生(4)研究生(2)	7
3	6月27日	52	同 上	MC学生(4)研究生(2)	7
4	9月12日	50	同 上	MC学生(3)研究生(2)	6
5	9月19日	38	同 上	MC学生(4)	5
6	9月26日	33	同 上	MC学生(3)	4
7	10月3日	37	同 上	MC学生(3)	4
8	10月17日	42	同 上	MC学生(2)	3
9	10月23日	39	同 上	MC学生(2)	3
10	11月7日	43	同 上	MC学生(3)	4

Table 6. 失語症グループ訓練ケース会議の全会議内容の分析結果指数

ケース会議 の回数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	平均
\bar{X}_1	2.83	2.71	2.40	2.90	2.71	2.83	2.82	2.68	2.65	2.77	2.90	2.57	2.86	2.51	2.83	2.99	2.84	2.99	2.77
\bar{X}_2	1.57	1.43	1.59	1.53	1.70	1.78	1.49	2.04	2.01	1.66	1.45	1.63	1.44	1.06	1.83	2.16	1.69	1.51	1.64
\bar{X}_3	2.57	2.28	2.94	2.98	2.94	2.93	2.89	2.97	2.88	2.83	2.91	2.91	2.95	2.96	2.97	2.99	2.96	2.97	2.88
\bar{X}_4	2.00	2.57	2.64	2.24	2.16	2.00	1.00	2.60	2.55	2.59	2.65	2.88	3.00	2.89	2.89	2.00	2.50	2.30	2.41
\bar{T}	2.24	2.25	2.39	2.41	2.38	2.39	2.05	2.57	2.52	2.46	2.48	2.50	2.56	2.36	2.63	2.54	2.50	2.44	2.43

Table 7. 症例報告ケース会議の全会議内容の分析結果指数

ケース会議 の回数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	平均
\bar{X}_1	2.93	2.84	2.88	2.66	2.83	2.78	2.36	2.86	2.94	2.69	2.78
\bar{X}_2	1.79	1.88	1.86	1.92	1.56	1.77	1.60	1.88	1.73	1.79	1.78
\bar{X}_3	2.89	2.76	2.96	2.87	2.93	2.76	2.92	2.72	2.92	2.91	2.86
\bar{X}_4	2.48	2.02	2.85	2.41	2.88	2.46	2.00	2.63	3.00	2.77	2.55
\bar{T}	2.52	2.38	2.64	2.47	2.55	2.44	2.22	2.52	2.65	2.54	2.49

5分間セグメントの分析結果指数を示す。但し、Table 10.において、算出不能な結果指数は一で示した。

5分間セグメントの分析では、失語症グループ訓練ケース会議において、5分間セグメント抽出の際、機能しないカテゴリー群が発生するのを防ぐため、ある程度の基準を設けた。すなわち、一

人の発話時間が3分を越える箇所、及びスーパーバイザーと臨床・観察者の発話のやりとりが5回以下の箇所を除外したにもかかわらず、Table 10.に見る通り、ケース会議の第3回、第6回、第9回、第13回、第15回、第16回、第17回、の計7回に機能しないカテゴリー群が現われ、算出不能な結果指数が出た。これら算出不能な結果指数ので

Table 8. 失語症グループ訓練ケース会議の全会議内容の事象数

ケース会議の回数 各カテゴリーの事象数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	平均
会議環境 カテゴリー	186	183	109	141	101	200	150	60	20	243	492	253	185	158	167	72	216	207	175
成長促進 カテゴリー	503	429	542	403	305	363	595	269	204	283	228	156	224	345	243	116	208	99	306
自己反省 カテゴリー	387	226	478	264	293	434	162	170	133	270	282	176	117	143	310	277	313	264	261
方策提供 カテゴリー	69	85	225	82	160	11	103	52	67	103	23	42	54	64	47	5	10	56	70

Table 9. 症例報告ケース会議の全会議内容の事象数

ケース会議の回数 各カテゴリーの事象数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	平均
会議環境 カテゴリー	506	245	386	327	396	144	174	361	392	282	321
成長促進 カテゴリー	182	298	221	281	251	230	387	327	196	229	260
自己反省 カテゴリー	65	58	268	160	119	86	65	32	78	114	105
方策提供 カテゴリー	81	94	111	84	75	85	90	66	119	123	93

Table 10. 失語症グループ訓練ケース会議の5分間セグメントの分析結果指数

ケース会議の回数 各結果指数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	平均
\bar{X}_1'	2.97	2.70	2.45	2.82	2.00	2.76	2.00	2.63	2.65	2.40	2.56	2.80	2.69	1.89	2.00	2.00	2.90	2.98	2.51
\bar{X}_2'	2.05	1.14	—	1.64	2.57	2.00	2.05	3.00	2.11	1.19	1.71	1.70	2.00	1.03	2.24	2.09	1.70	1.56	1.87
\bar{X}_3'	2.80	2.00	2.92	3.00	3.00	2.78	2.87	3.00	2.94	2.97	2.83	2.83	2.87	2.00	2.70	3.00	2.97	3.00	2.80
\bar{X}_4'	2.00	2.00	3.00	2.00	1.00	—	1.00	3.00	—	2.00	2.78	3.00	—	3.00	—	—	—	2.86	2.30
\bar{T}'	2.46	1.96	—	2.37	2.14	—	1.98	2.91	—	2.14	2.47	2.58	—	1.98	—	—	—	2.60	2.33

Table 11. 症例報告ケース会議の5分間セグメントの分析結果指数

ケース会議の回数 各結果指数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	平均
\bar{X}_1'	2.68	2.72	2.53	2.44	2.90	2.50	1.15	2.88	2.99	2.99	2.58
\bar{X}_2'	2.64	2.50	1.55	1.63	2.67	2.00	1.45	1.67	1.45	3.00	2.06
\bar{X}_3'	2.95	2.83	3.00	2.79	2.77	2.88	3.00	2.33	3.00	2.95	2.85
\bar{X}_4'	2.00	2.33	2.69	2.88	2.00	2.00	2.00	2.00	3.00	2.00	2.29
\bar{T}'	2.56	2.60	2.44	2.44	2.59	2.35	1.90	2.22	2.61	2.74	2.45

たケース会議では、それぞれ会議効果 (\bar{T}') が算出不能となった。

症例報告ケース会議の5分間セグメントについて

では、Table 11に見る通り、全10回のケース会議において、すべてのカテゴリー群が機能し、各結果指数が算出された。

そこで、各ケース会議の会議内容全体と任意に抽出した5分間セグメントの各カテゴリー群の分析結果指数と会議効果のそれぞれ対応するもの同士についてt-testを行なった。その結果をTable 12.に示す。ここでは、 $\overline{X_1}-\overline{X_1}'$ の組(会議環境カテゴリー群)と $\overline{X_2}-\overline{X_2}'$ の組(成長促進カテゴリー

Table 12. 全体と5分間セグメントのt-testの結果

	t	df	P
① $\overline{X_1}-\overline{X_1}'$	2.07*	54	.05
② $\overline{X_2}-\overline{X_2}'$	-2.22*	52	.05
③ $\overline{X_3}-\overline{X_3}'$	0.91	54	NS
④ $\overline{X_4}-\overline{X_4}'$	1.12	48	NS
⑤ $\overline{T}-\overline{T}'$	1.01	47	NS

群)に有意差が認められた。ちなみに、df=54のとき、5%のPに対応するtは2.03である。

次に、会議内容全体と5分間セグメントの各分析結果指数との、両者間の相関係数(γ_A)をそれ

Table 13. 相関係数の算出結果

相関を求めた組	相関係数(γ_A)
① $\overline{X_1}-\overline{X_1}'$	+0.48
② $\overline{X_2}-\overline{X_2}'$	+0.48
③ $\overline{X_3}-\overline{X_3}'$	+0.57
④ $\overline{X_4}-\overline{X_4}'$	+0.63
⑤ $\overline{T}-\overline{T}'$	+0.68

それぞれ対応する結果指数同士について算出した。それをTable 13.に示す。

Table 13.見る通り、 $\overline{X_3}-\overline{X_3}'$ の組では、 $\gamma_A=+0.57$ 、 $\overline{X_4}-\overline{X_4}'$ の組では、 $\gamma_A=+0.63$ 、となり、ある程度強い正の相関係数が認められた。t-testの結果、有意な差の認められた $\overline{X_1}-\overline{X_1}'$ の組及び $\overline{X_2}-\overline{X_2}'$ の組では、共に $\gamma_A=+0.48$ で中程度の正の相関が認められた。会議効果 $\overline{T}-\overline{T}'$ の組では、 $\gamma_A=+0.68$ である程度強い正の相関が認められた。

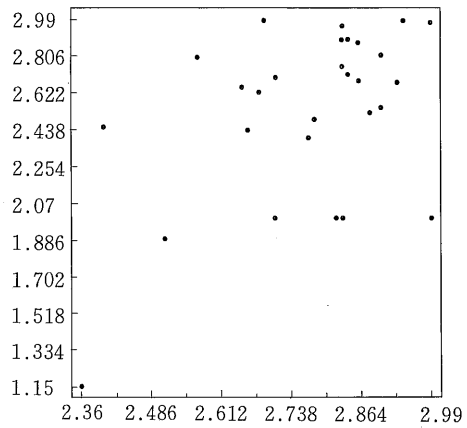


Fig 1. $\overline{X_1}$ と $\overline{X_1}'$ のデータ散布図

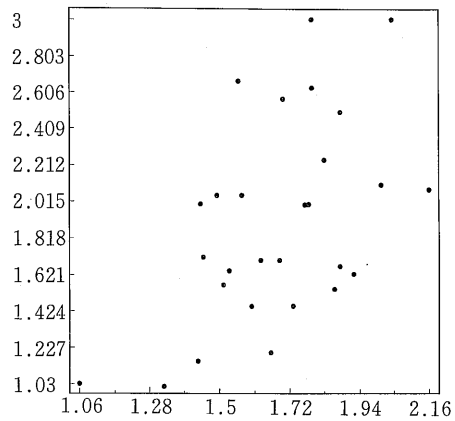


Fig 2. $\overline{X_2}$ と $\overline{X_2}'$ のデータ散布図

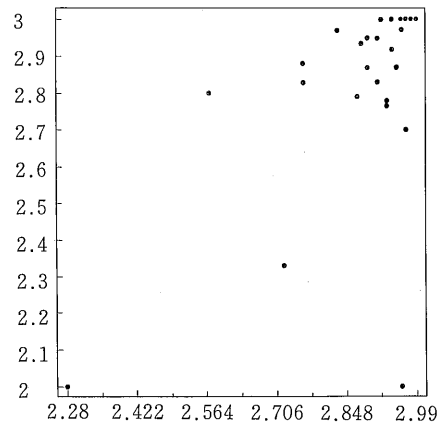


Fig 3. $\overline{X_3}$ と $\overline{X_3}'$ のデータ散布図

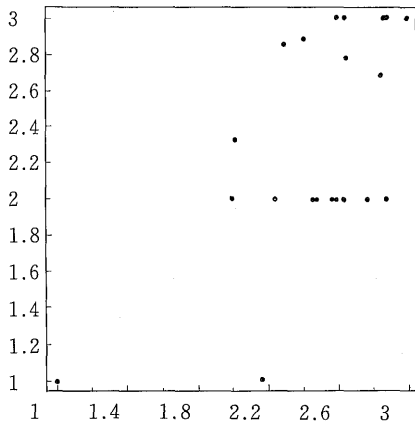


Fig 4. \bar{X}_4 と \bar{X}_4' のデータ散布図

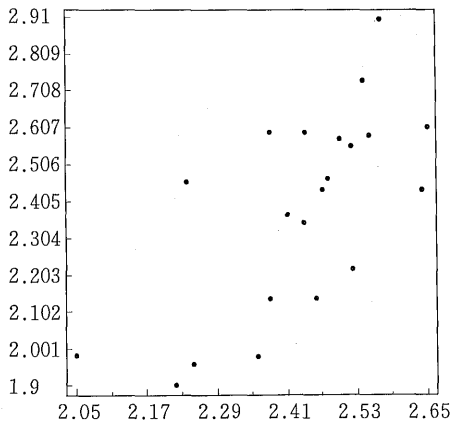


Fig 5. \bar{T} と \bar{T}' のデータ散布図

2. データ散布図 Table 13.に見られる相関係数について、各組のデータ散布図を以下に示す。

Fig 1.とFig 3.では、28回の全ての会議のデータがプロットされたが、Fig 2.とFig 4.及びFig 5.では、いくつかの会議の5分間セグメントに会議効果の算出不能なものが出たため、各々27個、22個、21個のデータがプロットされた。

これらの散布図を見ると、ある程度強い正の相関関係を示したFig 3.とFig 4.及びFig 5.では、データのバラツキが少なく、大体において右上がりに近い傾向を示しているが、中程度またはそれ以下の正の相関の認められたFig 1.とFig 2.では、かなりデータにばらつきが見られた。

以上、5分間セグメントの分析結果について述

べてきた。

3. 評定の一致率についての結果 ケース会議を2回ランダムに採上げて、その二例における会議内容の評定の一致率をTable 14.に示した。評価は研究者以外に2名の計3名で行ない、3者の一致率を求めた。同一のカテゴリー内の違いでレバ

Table 14. 会議内容の評定の一致率

ケース会議 一致率	ケース会議第一例	ケース会議第二例
全 体	83.7(%)	91.5(%)
カテゴリー別	99.5	91.5

ルが同一のものは、結果指数に影響を与えないので、その一致率はカテゴリー別の欄に示した。ケース会議第一例では、全体が83.7%の一致率で、カテゴリー別でみると99.5%の一致率となった。第二例では、共に91.5%の一致率となった。

考 察

ここでは、分析結果に基づいて、会議内容全体を代表するものとして5分間セグメントを用いることの妥当性、及び分析結果の客観性について考察する。

1. 5分間分析の妥当性に関する考察

分析対象として用いたケース会議は、Table 4.とTable 5.に示したように、失語症グループ訓練ケース会議、計18回と、症例報告ケース会議、計10回と、合計28回のケース会議である。Table 6.及びTable 7.の各ケース会議の各カテゴリー群における分析結果指数を見てみると、会議内容全体では、各分析結果指数がすべて算出されている。しかし、Table 10.に示したように、5分間セグメントでは、失語症グループ訓練ケース会議において、18回のケース会議のうち7回のケース会議において、 $\bar{X}_4' \sim \bar{X}_4'$ のカテゴリー群のいずれかの分析結果指数が算出されておらず、会議効果が算出不能となっている。症例報告ケース会議の5分間セグメントではTable 11.に見る通り、10回の全ケース会議の各分析結果指数が算出されており、すべての会議効果が算定された。又、会議効果が算出不能となったケース会議について見てみると、7回のうち6回のケース会議が、方策提供カテゴリー群(\bar{X}_4')の分析結果指数の算出不能によるものであった。

そこで、算出不能となった失語症グループ訓練ケース会議の方策提供カテゴリー群について調べてみると、Table 8.に見る通り、方策提供カテゴリー群に含まれる事象数がケース会議全体において他のカテゴリー群より少ない、という事が分かる。

ところで、症例報告ケース会議では毎回異なった症例を1例ずつ採上げて、報告をもとにその症例の持つ問題点と解決策についてディスカッションを行なった。そこでは、STSの方策提供カテゴリー群に含まれる「カテゴリー10」の問題行動の指摘や要求、及び同じく「カテゴリー11」の治療方策の提供または要求、に該当する発言が、学生にとって比較的出やすい状況であったのではないかと、思われる。しかし、失語症グループ訓練ケース会議では、治療をうける人が複数であることから、どうしても一人一人の行動を細かく観察しにくいことや、又、長期計画に基づいて訓練内容を一定期間定めているので、一回の訓練だけではどうしても前回との差異や問題点を発見し難いという事が言える。この場合、どうしてもグループケース会議では臨床・観察者は、スーパーバイザーの数回の指摘にもかかわらず、グループ訓練を受けている失語症者全員の印象的な感想を述べてしまい、問題行動の指摘や要求、あるいは治療方策の提供または要求に関する発言が出にくいケース会議が現われてしまう。その結果、会議内容全体に含まれる方策提供カテゴリー群の事象数が少なかったのではないかと推察される。

実際、以上の点を考慮すると、STSにおいて5分間セグメントを用い、そのカテゴリー群の結果指数が算出不能となった場合には、それは結果指数の算出不能という事を示しているだけでなく、そのカテゴリー群の会議内容全体に含まれる事象数がかなり少ない、という事を示唆している可能性がある。

次に、Table 12.に示すように、会議内容全体と5分間セグメントの間でt-testを行なった結果、会議環境カテゴリー群 ($\bar{X}_1 - \bar{X}_1'$) と成長促進カテゴリー群 ($\bar{X}_2 - \bar{X}_2'$) に有意差が認められた。又、

Table 13に示すように、t-testで有意差の認められた会議環境カテゴリー群と成長促進カテゴリー群は、相関係数の値が共に $\gamma = +0.48$ と4つのカテゴリー群の中で最も小さくなっている。しかしながら、会議効果に関する相関係数は $\gamma = +0.68$ で、ある程度強い相関を示した。

さて、5分間セグメントが会議内容全体を代表するためには、その要件として2点考えられる。すなわち、各カテゴリー群において5分間セグメントと会議全体のt-testの結果に有意差が認められないこと、及びすべてのカテゴリー群の相関係数の値がある程度以上に大きいことが条件となる。このような見方からすれば、5分間セグメントの質は、会議効果という点で、ある程度会議全体を代表していると言えよう。しかしながら、カテゴリー別の代表性を高めるためには、さらに工夫がなされる必要がある事を示唆している。

2. 評価の一致率に関する考察

カテゴリー別の3者の一致率は、Table 14に示したように、ケース会議第一例で99.5%、第二例で91.5%とかなり高いものであった。このことは、スーパーバイザーの発言を二つのカテゴリー群に分け、また、臨床・観察者の発言を二つのカテゴリー群に分ける際、その分類が評定者によって食い違うことは非常に少ない事を示している。又、3段階のレベル評定においても、評定者間でかなり一致した分類がなされることを表示している。従って、このSTSを用いる場合、データのカテゴリー分類・評定の際の客観性は、かなり高い信頼性があると言えよう。

文 献

- 姉崎弘・岡部克己 (1989) : 言語治療におけるケース会議用検査バッテリーの開発と有効性の検討について。心身障害学研究 13 (2) : 33-48.
- Oratio, A.R. (1982) : Supervision in speech pathology—a handbook for supervisors and clinicians. University Park Press 1-127.

附表 1

分析処理システム(A)

機能したカテゴリ・レベル		事 象 数	効 果 的 レ ベ ル	機能した時間 [秒]
1	3			
	2			
	1			
2	3			
	2			
	1			
3	3			
	2			
	1			
9	3			
	2			
	1			
10	3			
	2			
	1			
11	3			
	2			
	1			

附表 2

分析処理システム(B)

スーパーバイザー： _____ 臨床・観察者： _____ 日付： _____ 会議時間： _____

スーパーバイザー用カテゴリ計算				臨床・観察者用カテゴリ計算			
会議・環境 カテゴリ群	事象数	効果的レベル	時間(秒)	自己反省 カテゴリ群	事象数	効果的レベル	時間(秒)
1				8			
2							
3				9			
4							
合計				合計			
効果的レベルの合計 = _____ , \bar{X}_1 = 会議環境指数 事象数の合計				効果的レベルの合計 = _____ , \bar{X}_3 = 自己反省指数 事象数の合計			
成長促進 カテゴリ群	事象数	効果的レベル	時間(秒)	方策提供 カテゴリ群	事象数	効果的レベル	時間(秒)
5				10			
6				11			
7							
合計				合計			
効果的レベルの合計 = _____ , \bar{X}_2 = 成長促進指数 事象数の合計				効果的レベルの合計 = _____ , \bar{X}_4 = 方策提供指数 事象数の合計			
(スーパーバイザー合計) 事象数の総合計 = _____ , 時間総合計 = _____				(臨床・観察者合計) 事象数の総合計 = _____ , 時間総合計 = _____			

(会議の総合的評価) 会議効果 \bar{T} = _____ (低) _____ (高) _____ (コメント)

1 2 3

Summary

A Study of the Validity of Using a 5-minute Segment for Analyzing Supervisory Conferences

Katsumi Okabe and Kayako Nakamura

The purpose of this study is twofold. The first problem of this study is to investigate whether a 5-minute segment, selected randomly in the middle of a supervisory conference, is representative of the entire conference. The Japanese version of the Supervisory Transactional System (STS) was used for analyzing transaction within the language pathology supervisory conference setting. The second problem is to examine inter-judge reliability of the instrument.

Student's t-test was applied for this study. Pearson Product moment correlation coefficients were also determined. Within the limits of the design of the present study, the following general conclusions were reached:

1. Comparison of the experimental and control groups produced a t-ratio of 1.01, which is not significant at the .05 level of confidence.
2. The correlation of a 5-minute segment was relatively high to consider a 5-minute segment to be a representation of the entire conference.
3. Inter-judge reliability scores were also found to be high (83.7%--99.5%).

Key word : Supervision Supervisor Language Pathology Conference effectiveness
Supervisory Transactional System (STS)